CSI JOURNAL 2024

Center for
Social Innovation
Initiatives

「対話」がつくる自分と現実

CSIクロストーク

対談：CSIの目指すべき未来

公立大学法人 長野県立大学 理事長 佐藤慎次郎 × CSIセンター長 東俊之

動き出した、新たな挑戦

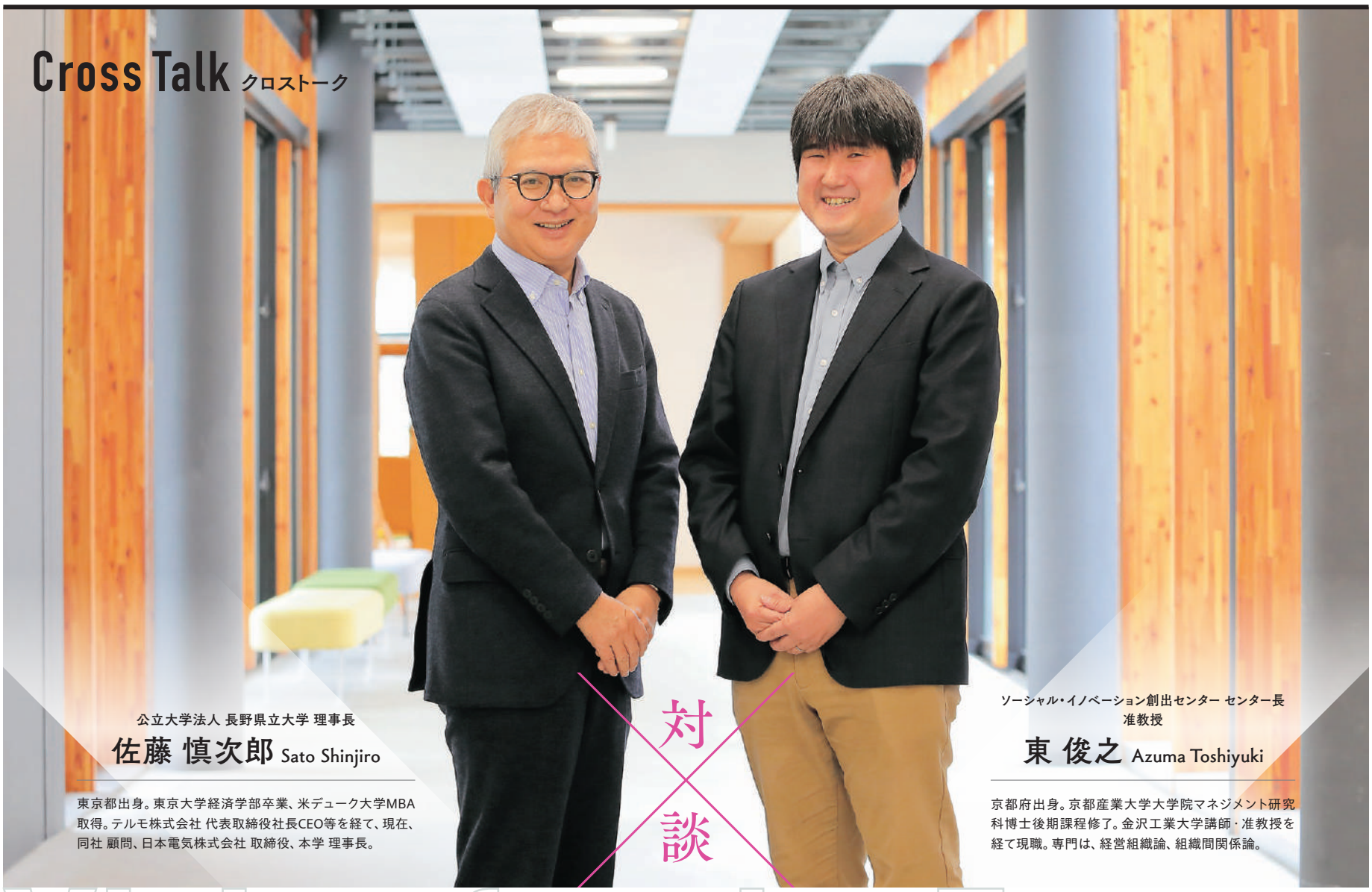
産・官・民・学が生み出すもの

CSI活動報告

産官民学の連携／デリバリー・アカデミア
地域で活躍する学生たち
SDGsへの取り組み／人材育成
公開講座／ CSI地域コーディネーター座談会

長野県立大学
THE UNIVERSITY OF NAGANO

Cross Talk クロストーク



公立大学法人 長野県立大学 理事長
佐藤 慎次郎 Sato Shinjiro

東京都出身。東京大学経済学部卒業、米デューク大学MBA取得。テルモ株式会社 代表取締役社長CEO等を経て、現在、同社 顧問、日本電気株式会社 取締役、本学 理事長。

対談

ソーシャル・イノベーション創出センター センター長
准教授
東 俊之 Azuma Toshiyuki

京都府出身。京都産業大学大学院マネジメント研究科博士後期課程修了。金沢工業大学講師・准教授を経て現職。専門は、経営組織論、組織間関係論。

Vision for the Future

長野県立大学とCSIが目指すべき未来

2018年4月の開学から、7年。卒業生も輩出し、長野県立大学は次のフェーズに入りました。地域に開かれた知の拠点として目指すべき姿とは。今年、新たに着任した佐藤理事長と東センター長が、それぞれの熱い思いを語ります。

新たなステージに進む長野県立大学

東 今日はよろしくお願いします。理事長に就任されてしばらく経ちますが、長野県立大学の印象はいかがですか。

佐藤 やはり「若い大学」というのが一番ですね。フレッシュで開放的で、輝いている。発展途上の面白さと言えるんでしょうか、学生も先生方も自分たちが創り上げているという意識が強く、「自分たちの大学」に愛着を持っていらっしゃるように感じます。この自主性や柔軟性は大学としては非常に稀有であり、大切に育てていきたい文化だと思います。

また、学生たちが大学にコミットしている時間がとても長いように思います。キャンパスの在り方が、学ぶだけではなく集い語り合えるような、良い雰囲気を醸し出していますね。理事長という存在は、学生たちにとっては遠いものだろうと思っていたのですが、実際に訪れてみると迎え入れてくれるような温かさがあって、これは私にとってとても嬉しいことでした。今後はさらに学生たちと接点を持ち、コミュニケーションの輪に入っていきたいと思っています。

東 ぜひ、授業にも参加していただきたいです!

佐藤 そうですね。若い人と意見を交わせるのは非常に興味深いですし、ぜひお願いします。私も学生たちから大いに刺激を受けそうです。

東 CSIという存在についてはどう感じられましたか。

佐藤 CSIは、他の大学にはない画期的な組織です。地域に対する大学の新しい在り方を確立するための「仕組み」をつくろうとしている、そのチャレンジに驚きました。地域と大学が、互いに認め合い交流する中でイノベーションを創出し、より良い未来をともに目指す。これは非常に重要な使命であり、やりがいのある大きな挑戦だと思います。モデルケースがない中でクリエイティブなことを継続的に行うことは大変なことも多いと思いますが、じっくりと時間をかけて取り組んでほしいと思います。

東 私もセンター長に就任して、改めてCSIの意義を考えるようになりました。長野県立大学と地域を結ぶHUBの役割を担うものとして、今後もさらに活動を展開していきたいと思っています。

では来年度で8年目に入る長野県立大学の今後について、どのようにお考えでしょうか。

佐藤 地域の期待を背負い、使命を持って開学され、前理事長や学長をはじめとする多くの方が奮闘してここまで育った大学です。まさしく土壌を作り、種を播いて水をやり、学生という苗木を育ててきた。そうして今、ようやく卒業生という若木が社会に出て、ここから次の、豊かな森へ成長するステージに入ったのではないかと感じています。これは非常に難しい時期になってきているとも言えます。開拓、開墾の勢いが落ち着いたからこそ、見えなかった課題や悩みも出てくる。だからこそ、焦らずにコツコツと、豊かな実りのある森、魅力ある森に育てていかなければと思います。

東 森の木々がそれぞれに豊かな実りをもたらすよう、私たち教員も努力していかなければと身の引き締まる思いです。教員一人ひとりがモチベーションを高く持ち、大学とともに成長していければと思います。

佐藤 先生方は開学の理想を胸に、喜びを持って指導に取り組まれているように思います。今後も、人材を育てることに達成感を感じていただけたら嬉しいですね。そして、どんな時も「ATM（明るく・楽しく・前向きに）」です。これは私のモットーでもあります。一生懸命取り組んでも、うまくいかないことや辛いこともある。だからこそ、この気持ちを忘れずに日々励んでいくと、周りの人が応援してくれるんです。生きる知恵ですね。周りを巻き込み、支えてもらって発展していくために、合言葉は「ATM」です!

東 わかりました(笑)!「ATM」は地域や学生との連携が多いCSIのメンバーにとっても、マインドを整える大切な言葉になりそうです。

「対話」を通し、自ら思考する力をつけて

東 学生と地域との関わり方について、何かアドバイスはありますか。

佐藤 学生たちには「現場」を見る、知ることから始めてほしいと思いますね。「ものづくり」も昔は作り手が勝手に作って売り手を探していましたが、今は現場のニーズを拾い上げ、それを深掘りしていく中から新しい発見や開発が始まります。大切なのは「対話」なんです。共通体験をし、現地で対話をしながら考えないと、本当の「価値」は生まれません。地域の課題やニーズも、うわべだけを知ってもアイデアは浮かばない。イノベーションは天から降ってくるものではなく、地に足をつけて対話を重ねることで、見えてくるものなんです。だからこそ、できるだけ多くの学生さんたちに地域に出て、いろいろな人と対話をしてもらいたいと思います。もちろん、社会に対する最低限のルールやマナーがあります。CSIには、最初の一歩が踏み出せない学生さんのためのノウハウがしっかりと蓄積されていると思いますので、まずはCSIに一歩踏み出してもらいたいですね。また、地域の皆さんにも、今以上に積極的に関わっていただければありがたいと思います。互いに刺激を与え合う存在になれたら最高ですね。

東 私たちもできるだけ多くの学生に地域との対話の機会を創出できるよう、取り組んでいきたいと思います。

佐藤 インプットから自分で思考し、アウトプットにつなげるステップを学んだ学生は社会に出ても強いし、イノベーションを起こせる人材になるはず。長野県立大学の卒業生には、そのベースができている学生が多いと思います。これから毎年社会に旅立っていく学生たちとの縁をつなぎ、接点を持ち続けられるネットワーク作りも急務ですね。卒業生は大学の財産です。地域へ、全国へ、世界へ飛び立っていく卒業生は、大学のサポーターでありコラボレーターになり得る存在です。卒業生を活かすことで、CSIはもっと強い組織になると思います。

東 確かにそうですね。これまでは目の前の学生を育てることに注力し、卒業生との関係性はまだ不十分なところが多いように感じます。これからどんどん卒業生の数も増えていきますし、彼ら、彼女らがCSIを活用して新たなイノベーションを起こしてくれれば、こんなに嬉しいことはないですね。

佐藤 私は日本の大学とアメリカの大学に行きましたが、アメリカの大学からは卒業して30年以上経っても、毎週のようにメッセージが届くんです。これはすごいことだし、大学を身近に感じます。長野県立大学には、ぜひ卒業生が常に大学を身近に感じ続けられるようなアクションを起こしてほしいですね。

東 はい。早急に取り組む課題として考えていきたいと思います。最後に、今後の大学、また学生に期待することはありますか。

佐藤 他大学との連携や学科間の交流などがもっと活発であるといいなと思います。効率よく必要な知識だけを得る直線的な学びでは、思考の幅は広がりません。全く違う分野の知識や同級生の活動が、新しい発見を持たせてくれることも多いはずです。

社会における大学の意義を考えたとき、与えられた知識を蓄えるだけではなく、自分自身で考える力、思考するための引き出しを増やす力、つまりアウトプットにつながる創造的な思考を持つ人間の育成こそが大学に求められていると考えます。そのためには、少し頭をやわらかくして積極的にインプットするチャンスにチャレンジしてほしい。長野県立大学の学生たちには、その力を身につける可能性とポテンシャルがあります。自分の未来を信じて、成長していってほしいと思います。

東 ありがとうございました。CSIも、学生、卒業生、地域の皆さんのHUBとして、試行錯誤を重ねながら新しいイノベーションを生み出せるよう、その使命に改めて立ち返り今後も役割を果たしていきたいと思います。

佐藤 「ATM」でね(笑)!

CSIのミッション

持続可能な社会の実現を目指し、ソーシャル・イノベーションを促進します。

CSIは、「社会課題を生まない」「社会課題を解決する」ことに理念を持つ人が、一歩を踏み出せるシステムを醸成し、持続可能な社会の実現に挑戦しています。
多様な立場の人々が絡み合う「オープン・イノベーション」を軸に、社会課題を解決するための新しい仕組みやサービス、商品等の開発を促進します。

知と実践の循環

社会的課題に取り組む事業者・創業者等を支援

地域の事業者と学生をつなぎ、社会人の大学へのアクセスを促進し、
大学の知を地域に還元

大学内外の専門家による コンサルティング	起業に関連した 講演・ワークショップの提供
事業者などへの オープン・イノベーション支援	イノベーションにつながる ネットワーク創出
SDGs促進	審議会・企業研究などへ講師派遣 共同研究等の促進

大学教育との連携

地域におけるイノベーションの実像をロールモデルとして学生に提示し、
次世代のイノベーターを養成

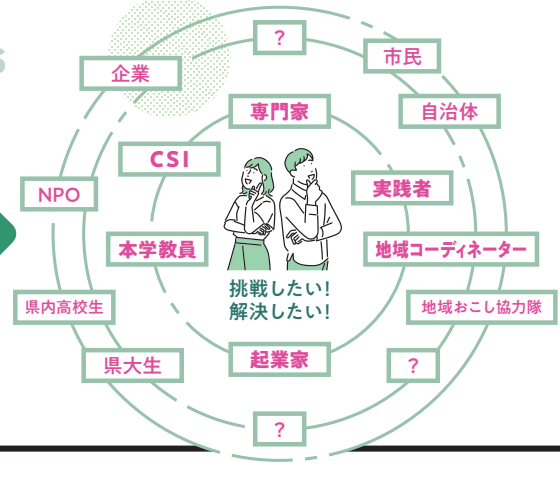
大学院生・学部生が 地域・社会と関わる機会	学生と県民が共に学ぶ 公開講座の開催
企業や行政と連携しながら 問題解決機会の創出 (Problem Based Learning)	創業者・経営者付き 「カバン持ち」挑戦の機会を創出

CSIへのアプローチ An Ecosystem for challenges

〇〇に挑戦したい!
〇〇を解決したい!

ヒアリング・意見交換
csi@u-nagano.ac.jp

CSIを含めた
挑戦するエコシステムへ
接続・サポート



Special Feature

動き出した、新たな挑戦

〈産・官・民・学が生み出すもの〉

case 1 Dialogue for Change with Rakuten

こんにちは、楽天グループサステナビリティ部ソーシャルインパクトグループの長野と申します。今年度で3年目となるDialogue for Change with Rakuten、昨年度に引き続き長野県立大学の皆さんとご一緒できていることを大変嬉しく思います。

皆さんは「対話」に対してどのような印象をお持ちでしょうか。本プログラムでは、「対話」は「会話」と「議論」の中間の存在であり、「特定のアジェンダについてお互いの意見の違いを理解し合い、質問によって相手の知性を引き出すもの」と定義しています。本プログラムを通じて大学生の皆さんから、普段楽しむための「会話」や結論を出すための「議論」の機会はあっても、本音を打ち明けながら答えのない問いに向き合う「対話」の機会は少ないという声があがることがあります。私自身のこれまでの経験を振り返ってみても、このような率直な声に共感する部分は多くあります。初年度から本プログラムに参加者として関わっていたのですが、本プログラムを通じて「対話」の持つ力と価値に共感しました。「対話」が昨今複雑化している社会課題など答えのない問いと向き合いながら、社会を変革するための鍵となるのではないかという仮説のもと、現在は本プログラムのディレクターとして設計・運営に携わっています。

報告会の様子

「対話」を進めるにあたっては、理論や手法だけではなく場の多様性が不可欠です。今年度も長野県立大学の皆さんと連携できたことで、各チームの構成が大学生・楽天従業員・自治体職員・地域企業従業員とさらに多様になり、学生の皆さんの積極的な姿勢と次世代の視点が「対話」を推進していると感じております。

今年度のテーマは「多様な幸せを実現する地域のレジリエンス」です。2025年1月25日に楽天クリムゾンハウス（本社）にて、各チームが半年間の「対話」から得た気づきを社会に発信する最終報告会が行われました。単なる報告会ではなく、チーム発表から得られた気づきをもとに会場の約100名の皆さんで「対話」を行い、それぞれが未来に向けたアクションを考える場となりました。（詳細レポートを後日楽天コーポレートサイトにて公開予定）

今年度の本プログラムはひと区切りとなりますが、今後も皆さんと共に、様々な形で「対話（Dialogue）」を軸に「社会変革（Change）」を進めていきたいと考えております。進化するDialogue for Change with Rakutenのこれからにぜひご期待ください。

楽天グループ株式会社サステナビリティ部サステナビリティ課
ソーシャルインパクトグループ Dialogue for Change 2024 ディレクター 長野 椎奈さん

case 2 CSI学生コーディネーターの取り組み

私たち学生コーディネーターは2023年10月から、長野県立大学で学生活動の促進に取り組んでいます。「学ぶ、出会う、やってみる」の3つの土壌を整えることをテーマに、今年度は特に「出会う」と「やってみる」環境づくりに注力しています。

「出会う」では、学生や地域の活動をnoteで発信し、長野県と長野市の活動を紹介する「UN（The University of Nagano）LOCAL HOOD MAP」を作成することで、学生がオンライン上でさまざまな活動を知ることができる土壌を整えています。「やってみる」では、毎月の振り返りと目標を共有する企画「Hi！マイプロコミュニティ」の運営や、自治体・企業との協働プロジェクト支援を行うことで、やってみることを応援し合える土壌づくりと機会創出をしています。また、日々の学生との対話を通じて、人やアイデアをつなぐ活動も進めています。

（CSI学生コーディネーター / グローバルマネジメント学部 小宮山 文登さん）

case 3 飯田市クラフトコーラワークショップ

県立大学の学生とのコラボレーション

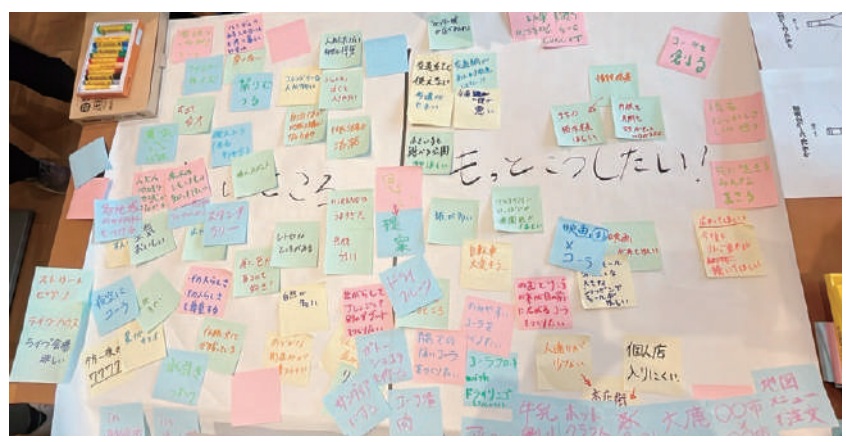
私たちは、ソーシャルデザインを合言葉に、障がい児・者福祉サービス事業をはじめとし、日々の活動から見えてくる様々な地域・社会の課題と向き合い、未来志向の解決策を考えて実践する活動を行っています。そのような中、「地域をもっと元気にしたい！」との思いから、南信州産の果物などを原料に入れたクラフトコーラ、『南信州コーラ』の開発に取り組みはじめました。

県立大の学生さんとの出会いは、CSI地域コーディネーターの新井直彦さんとのご縁から始まりました。事前にCSIの須藤さんに取り組み状況や商品化に向けての課題等お伝えした上で、当日は7名の学生さんに参加いただきました。2日間のプログラムは、全て学生さんが企画・運営し、南信州コーラと地域の未来について、地元中学生と高校生を交えたグループディスカッションやワークショップ形式の学習会を中心に意見交換しました。南信州コーラを題材に、地域を元気にする様々なアイデアや課題の解決策などを頂戴し、私たちが意識していなかった地域の魅力や可能性について、大きな気付きを得ることができました。また、商品価値を高めるアイデアや販路開拓、2日間の研修会場となったカフェブース「並木テラス」の活用方法に至るまで、各学生が専攻する専門分野からの貴重なアドバイスや、直ぐにでも実践したくなるような提案を数多くいただきました。今回の学びの中で出された課題や素敵なアイデアにつきましては、今後も継続的な取り組みとして、学生さんと一緒に解決策を見出し、アイデアを形に結びつけていきたいと考えています。

（一般社団法人ソーシャルデザインプロジェクト丘のりんご 代表理事 丸山 まゆみさん）

11月19日・20日に、食健康学科の学生6名とグローバルマネジメント学科の学生1名が、丘のりんごさんと共に南信州について学ぶフィールドワークを行いました。この活動は、丘のりんごさんの南信州への想いが込められたクラフトコーラのアイデアを考える前に、まず南信州について理解を深めようと企画しました。2日間で飯田の歴史を学びながら旧飯田市街地を街歩きしたり、地元の中高校生と共に対話し、町の良いところや不便なところを若者の視点で考え、意見交換をしました。この活動を通じて学生たちは飯田市の魅力を再発見するとともに、温かく迎え入れてくださった丘のりんごさんから商品や活動への想いを直接聞くことができ、アイディアブレストでは模造紙いっぱいの意見が出ました。またクラフトコーラだけでなく、果物の出がらし活用についても検討しています。今後も商品化に向けて楽しく活動を続けていきたいと考えています。

（CSI学生コーディネーター / 健康発達学部食健康学科 香取 美友さん）



産官民学の連携

産・官・民・学それぞれの得意分野を
活かしながら連携して取り組むことにより、
新たな価値創出や地域課題の解決を
推進しています。

ひろがれ! 推し村プロジェクト

長野県元気づくり支援金を活用した本プロジェクトは3年目となります。「自分の好きを開放する」というテーマを掲げ、王滝村でやってみたいことをプロジェクトメンバーが自ら企画・開催し、「アウトラインプロジェクト」といった王滝村に普段はない刺激を与えてくれました。アウトラインプロジェクトとは、学生にキャンバスの上に寝そべってもらいメンバーの輪郭を写し取ると共に、周りに自分が描きたいものを自由に描いてもらいました。また、メンバーに対してインタビューを行い、王滝村で感じたことなどの言葉を拾い上げ文字起こししたものをまとめました。

今後も、王滝村に新たな視点やエネルギーをもたらすと同時に、王滝村で自分の好きを見つける活動として本プロジェクトを続けていければと思います。

（王滝村役場企画・観光推進室 企画係
主任 宮原 智也さん）

蔵の町並みキャンパス

2006年から取り組んでいる「蔵の町並みキャンパス」は、2025年に20周年という節目を迎えます。高等教育機関のない須坂市にとって、市域の資源を産・官・民・学の連携により、蔵の町「須坂」を大学のキャンパスとして活用し、学生の来訪による賑わい創出、新たな情報発信のまちづくり施策として重要な取り組みです。2024年、須坂の伝統的な町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。この文化遺産を将来に引き継いでいくため、建造物群を保存・活用することで、観光振興や地域の活性化につなげていきます。学生の皆さんには須坂の歴史や文化に触れていただき、授業や研究のフィールドとして引き続き活用いただくことを期待しています。

健康発達学部食健康学科学生による塩屋醸造見学

（須坂市まちづくり課 課長補佐 和田 敬宏さん）

郷土食新メニュー開発

長野県元気づくり支援金を活用した本事業は、今年度から初の取り組みとなります。この取り組みは、伝統的な郷土料理をベースに、食健康学科の学生と村民で現代のニーズに合った新しいメニューを創り出し、観光業や地域の食文化の発展に貢献することを目的としています。今回の郷土料理のベースとしては、「王滝なます」や「大平」など計10品を選定し、村民の伝統的な考えと、学生の新たなアイデアでさらに魅力的なメニューを開発しました。また、本事業を実施したことで、伝統的な技術や食文化が持つ力を再認識でき、次世代に伝えていく重要性を実感することができました。

今後も、学生と地域が協力して新しい価値を創造し、王滝村の食文化がより広く認知されるよう本事業を続けていければと思います。

（王滝村役場企画・観光推進室 企画係
主任 宮原 智也さん）

健康づくり推進員コラボ哲学対話

東御市は、令和5年度に長野県立大学と包括連携協定を結びました。長野県立大学の今村晴彦先生、馬場智一先生、神戸和佳子先生にお力添えをいただき、健康づくり推進員さんとの哲学対話を企画しました。地域において健康増進の推進役として活動いただいている健康づくり推進員さんの健康意識を高めるきっかけとしたいと思いました。2年目の今年は、試作したすごろく形式の対話ツールを用いて各年代の健康に関するエピソードに耳を傾け、対話をしました。慣れてくると話す声も大きくなり、話が弾んで時間内に収まりきらないほどで、体も心も充実した時間となりました。

コロナ禍が明けても、地域での様々な集まりや活動はもとに戻っていない状況ですが、地域での健康づくり活動が継続し、市民の健康が高められるよう、これからも取り組んでいきたいと考えています。

（東御市 健康推進課 健康増進係 係長 笹井 涼子さん）

地域連携シーズ集

本学教員の研究活動や地域貢献をわかりやすく提供するため、「地域連携シーズ集」を作成しました。このシーズ集は、各教員の専門分野や地域との連携実績、今後行いたい地域との連携内容が記載されており、地域の皆さまと本学教員との連携を深めるための重要なツールとなり、新たなコラボレーションの機会を創出し、地域の発展に寄与することを目指しています。地域の皆さまにとっての情報源として、ぜひご活用ください。なお、「地域連携シーズ集」は、右記のQRコードからご覧いただけます。

長野県立大学がこれまでに締結した協定一覧（2025.1.31現在）

No.	締結年月日	締結先	協定の種類
1	2018. 7.10	長野市	包括連携協定ほか
2	2018. 9.11	飯山市	包括連携協定
3	2018.10. 5	千曲市	包括連携協定
4	2019. 2. 5	長野県 BIPROGY㈱	ソーシャル・イノベーションに関する連携協定
5	2019. 3.15	中野市	包括連携協定
6	2019. 6. 4	須坂市	包括連携協定
7	2019.11. 8	KDDI㈱ （一社）長野ITコラボレーションプラットフォーム（NICOLLAP）	包括連携協定
8	2020. 1.31	（独）国立高等専門学校機構長野工業高等専門学校（長野高専）	包括連携協定
9	2020. 8. 4	長野県教育委員会 KDDI㈱	包括連携協定
10	2022. 3.29	国立大学法人信州大学	包括的連携協定
11	2022. 5.27	王滝村	包括連携協定
12	2023. 4. 1	飯綱町	教育・保育及び子育て支援分野における連携に関する協定
13	2023. 5.30	（一社）VENTURE FOR JAPAN （一社）長野ITコラボレーションプラットフォーム（NICOLLAP）	包括的連携協定
14	2023. 6. 1	（公財）ながの観光コンベンションビューロー	包括的連携協定
15	2024. 2. 6	東御市	包括連携協定
16	2025. 1.27	（公財）長野県産業振興機構	長野県内中小企業に対する支援連携に関する協定

デリバリー・アカデミア

長野県立大学は、地域の「知の拠点」として
地域に開かれた「ともに歩む大学」を目指しています。
その活動の一環として本学の教員が講師となり、
地域の皆さまにリカレント（生涯学習）、
リスキリングの機会を提供しています。

軽井沢高等学校

だれでもできる哲学対話

講師▶ グローバルマネジメント学部 馬場 智一 教授

「政治経済（受講者3年22名、2年17名の混合講座）」にて、今回は「休む」をテーマに哲学対話を実施していただきました。まず、哲学対話を成立させるための条件について馬場先生から説明を聞き、生徒たちは対話を始めました。

哲学対話では、生徒たちの表情がこれまでになく生き生きとしていて、この場所、この時間を心地よく感じ、楽しんでいる様子を見ることができました。講座を終えた生徒からは「どうしてそうなるのかを追求することによって、どんどん視野が広がっていくのを感じた」「みんな、考えることや感じることが違って、話していて楽しかった」「考えを共有することが大事だとわかった」といった感想が寄せられました。

学校や社会が、安心して対話をするための条件を整えることができれば、生徒たちはみずから他者とつながり、思考を広げ、深めていくことを実感しました。今回の学びをこれからの教育活動に活用していきます。

（軽井沢高等学校 教諭 佐藤 真平さん）

長野県木曽保健福祉事務所

今、保育に求められる子どもと保護者の支援とは

講師▶ 健康発達学部こども学科 中山 智哉 教授

当所では、保育技術の向上や保育内容の充実を目的として、木曽郡内の保育士を対象とした研修会を毎年開催しています。昨年度実施した研修会の参加者から、「保護者への支援」について学びたいとの意見を多くいただいたことから、中山教授に講義を依頼しました。

講義は、配慮を必要とする子どもたちへの対応や、保育所での子どもたちとの関わり方について、ご自身の経験を交えたお話から学ぶことができました。「保護者が子どもの一番の理解者であることを忘れない」「見る場面、関わる場面が保護者と保育士では異なるため、子どもの育ちや支援方針を保護者と共有していくことが重要」ということに、保育士の方々は子どもたちの様子を思い浮かべながら学ぶことができたのではないかと思います。

また、少子化が進み、木曽郡内の保育所等でも子どもの数が減少している中、「少人数であることもポジティブに捉えていける」という言葉には、保育士だけでなく木曽地域の方々にとっても、励みになるものではないかと感じました。

（長野県木曽保健福祉事務所 福祉課社会係
主任 藤原 一弘さん）

デリバリー・アカデミアへのお申し込み

デリバリー・アカデミアの講座内容の詳細や受講対象者、お申し込み手続き等については、右記のQRコードからご確認いただけますので、ご覧いただき、ご希望の講座にお申し込みください。

2024年度「デリバリー・アカデミア」実績一覧

月日	団体名	講座名	講師名
4月 18日	下諏訪向陽高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
4月 22日	飯田風越高等学校（2年生）	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
4月 22日	飯田風越高等学校（1年生）	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
5月 9日	木曽青峰高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
5月 16日	諏訪二葉高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
6月 28日	千曲市	地域社会における男女共同参画について	築山秀夫 教授
7月 11日	飯綱町区長・組長会	グループ活動・組織活動に役立つ経営組織論	東俊之 准教授
7月 23日	高山村議会	攻める自治体「東川町」-地方創生・地域活性化の実践モデル-	中村稔彦 准教授
8月 1日	（一社）長野上水内教育会	哲学対話で学習をさらに深めよう！	神戸和佳子 講師
8月 29日	長野県木曽保健福祉事務所	今、保育に求められる子どもと保護者の支援とは	中山智哉 教授
10月 1日	須坂市議会	私たちの暮らしとエネルギー産業の変革	穴山悌三 教授
10月 22日	かがやきひろば篠ノ井	レクチャーピアノコンサート 坂本龍一をめぐって考える日本の現代音楽	大南匠 教授
10月 22日	諏訪二葉高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
10月 25日	飯田風越高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
11月 8日	軽井沢高等学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
11月 19日	飯田風越高等学校（教職員）	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
1月 15日	長野市立長野高等学校	身近な事例から考える経営学	東俊之 准教授
1月 21日	長野市立長野高等学校	『あぶら』を考える -“あぶら”はそんなに悪者なのか-	杉山英子 教授
1月 22日	長野市立三輪小学校	だれでもできる哲学対話	馬場智一 教授
2月 19日	長野県町村議会議長会	攻める自治体「東川町」-地方創生・地域活性化の実践モデル-	中村稔彦 准教授
2月 19日	長野県中小企業家同友会	グループ活動・組織活動に役立つ経営組織論	東俊之 准教授
3月 1日	木曽開田こども園	今、保育に求められる子どもと保護者の支援とは	中山智哉 教授
3月 5日	木曽郡合同栄養士会	持続可能な農と食のありかた 最前線	秋葉芳江 教授

地域で活躍する学生たち

CSIは、学生の地域との連携支援を積極的に行っています。
楽しみながら地域とつながり、越境体験をしながら可能性を広げていく。
そんな学生が何に取り組んでいるのか。
活動を紹介してもらいました。

グローバルマネジメント学部2年
稲垣 てんま さん
ー キンダイチ同盟サークル ー

当サークルは、寮祭とハロウィンパーティを実施しました。私たちは学生主体で地域を盛り上げることを目的に活動しています。現在は相ノ木東町公民館を活用して週1回ゆる～く集まって、どのようなイベントを実施するかを話しています。失敗ばかりですが何だかうまく進んでいる気がします(笑)。

#全ては自信になる
#多世代交流　#楽しいは正義

戸隠盛上げ隊

私たち戸隠盛上げ隊は、戸隠の魅力発信を戸隠観光協会様と協力をして、県大の有志で活動をしています。今年の10月には、戸隠神社奥社の駐車場でマルシェを開催し、とんくるりん様、鏡池どんぐりハウス様に仕入れていただいた戸隠の特産物・果物等の販売をしました。また今年に開催した2つのフォトコンテストでは、合計で180件を超える応募が集まりました。これからも戸隠の魅力をさまざまな形で発信していきたいです!

#戸隠　#地域魅力発信　#県大から地域へ

@TOGAKUSHI_MORIAGETAI

グローバルマネジメント学部1年
坂本 直樹 さん
ー ボードゲーム ー

私は趣味であるボードゲームを活かした交流イベントを長野県で計11回行ってきました。ボードゲームの強みは「楽しみながら人と人がつながる」ことであり、各イベントでこの長所を活かせたと感じています。特に、子どもと大人が対等に話している姿を見るとボードゲームを軸に新しいコミュニティーを生み出せたと実感しています。今後も、新たな輪をボードゲームで生み出していきたいと考えています。

#ボードゲーム　#人と人のつながり
#地域コミュニティー

グローバルマネジメント学部3年
重盛 結月 さん
ー カフェ ー

大学3年生の春にカフェを運営し、その利益を保護猫団体へ寄付しました。準備段階では、情報収集や人脈作りのためにマルシェやフリーマーケットに参加し、多くの方と交流を深めました。おかげでたくさんのお客様に来店していただき、充実した活動ができました。現在は就職活動で忙しくしていますが、再びカフェを営業し、社会貢献を続けたいと考えています。営業した際はご来店お待ちしております!

#御飯屋美々　#お菓子らぶ　#猫

食健康学科3年　食健康学科2年
香取 美友 さん　原 真彩 さん
ー かとちゃんまぁちゃんのマフィン屋さん ー

食健康学科2・3年生のコンビで地域のイベントやオープンキャンパスなどに出向いてマフィンの販売をしています。お菓子作りが好きで人に食べてもらうのが好き、"食"で沢山の人とつながりたいという思いと、フィーリングの合う先輩との出会いから活動を始めました。地域の果樹園さんとのコラボやアレルゲンフリーのレシピの開発にも挑戦しています。

#美味しいシェアハピ♪
#食でつながる　#地球にも人に優しいレシピ

@KATOCHAN.MACHAN

@MEI.S_GALLERY

グローバルマネジメント学部3年
杉山 萌衣 さん
ー Mei's Gallery ー

私は、個人でアート活動をしています。今年1年間、特に友人が企画したイベント等での出店・デザインの仕事を主として活動してきました。また、SAKE ART LAB.の講師としての活動を始めました。自分の表現を活かして地域を盛り上げ、人々を笑顔にできて嬉しいです。来年も、得意を活かして活動の場を広めたいと思います!

#アート　#好きを仕事に
#酒アート

グローバルマネジメント学部3年

保坂 海 さん

ー出旅～idetabiー

長野県の大町市というところで若者たちの集う「居場所」となるような場を目指して開催した“出旅～idetabi”。地域の中で、人・音楽・食・自然・モノが交差していく空間から、私なりの“人生”に半歩でも踏み出してもらえると嬉しいなと考え、来年以降も継続して開催していくつもりです。

#自然　#場づくり
#野外音楽パーティー

@WE.ARE.BUDDIES

こども学科2年

疋田 乃愛 さん

ー We are buddies ー

We are buddiesの「おとなバディ」として、子どもバディと一対一の関係を築いています。肩書きや立場に関係なく、お互いを1人の人間として向き合うことで、お互いに良い変化が生まれることを実感しています。子どもたちにとって安心できる存在であると同時に、自分自身も成長できる活動です。

#一対一のつながり　#相互成長
#信頼関係

グローバルマネジメント学部3年

八田 登生 さん

ーキャリアデザインワークショップ
自分の『好き』から始めるライフデザインー

長野県内企業5社と大学生の交流会を企画しました。地域に夢を持てる企業があると気づき、地元の魅力をもっと知りたいと思ったのがきっかけです。将来を模索する中、企業と学生をつなぐ場を作りたいという想いが共感する方と出会い、イベントを実現しました。自分が一番楽しめた自信がありますが、それ以上に学生と企業が本音で、笑顔で、交流している様子を見て、大きなやりがいを感じました。

#ワクワクする出会い　#本音トーク　#やりたいことをやる

グローバルマネジメント学部4年

矢野 叶羽 さん

ー まちの場と人 ー

長野市を拠点に学生と「まちの場と人」をつなげる活動をしています。具体的な活動としては、商店街のまち歩きイベントや駅前のゲストハウスの場を借りて読書会を行っています。活動の中で増えた関係性を活かして、学生がイベントに出店しはじめ、活動をするきっかけとなるつながりなどを作っています。

#まなび対話コーディネーター
#合同会社キキ　#まち暮らし

グローバルマネジメント学部2年

小野 みなみ さん

ー 食べられる庭づくり ー

小布施町で市民の皆さんと図書館裏で食べられる庭づくりをしています。畑いじりやコモンズに興味があるので関わっていますが、大学の勉強内容を自分ごと化しやすい効果もあります。また、消防団員として地域を守る活動をしています。消防団では様々な職種の大人たちと色々な話をしたり、活動を通して地域の地理や特徴を知ったりして楽しく学んでいます。

#暮らし　#コモンズ
#地域を守る

グローバルマネジメント学部1年

堀米 剛広 さん　丸山 覇王 さん
萱津 昂聖 さん　小松 峻嘉 さん
下中 洸 さん　白倉 光輝 さん　平林 優樹 さん

ー スポーツクラブ スマイルスポーツ ー

子どもたちの体力低下が心配される今、楽しく体を動かして健康的に成長できる場を作りたい！そんな思いから、NPO法人を立ち上げます！学校と連携して、参加しやすいスポーツプログラムを展開。高校生や大学生もボランティアとして活躍できる仕組みです。体力をつけるだけじゃなく、仲間と絆を深めたり、自信を育てたりするのが目標。子どもたちが気軽にチャレンジできる地域を一緒に作っていきます！

#チャレンジ精神　#サードプレイス　#運動

SDGsへの取り組み

長野発、未来へつながるSDGsへの挑戦。
地域の皆さまと共に歩む、大学の多彩な取り組みの一端をご紹介します。

第3回 長野県立大学 SDGs・地域貢献アイデアコンペティション

令和6年8月7日に「第3回長野県立大学SDGs・地域貢献アイデアコンペティション」を三輪キャンパスラーニングホールにて開催しました。このコンペティションは、本学学生の自由な発想と豊かな着想による学内外でのSDGsの実現や地域の活性化・発展に向けた活動の経費を助成し、本学の地域貢献を推進することを目的として、第一生命保険株式会社様と炭平コーポレーション株式会社様のご支援により令和4年度から実施しています。

「地域の課題解決の取組」「SDGsの掲げる17の目標及び169のターゲットに関する取組」「長野県立大学の学内における課題解決への取組」のいずれか、または複数の視点から、5件の学生提案がプレゼンテーション審査に臨みました。

第一生命保険長野支社 重石支社長、炭平コーポレーション 鷲澤社長、金田一学長、東CSIセンター長の4名の審査員による審査の結果、グローバルマネジメント学部生で構成するグループ「Social meetup」の企画が第1位を受賞しました。

第3回長野県立大学SDGs・地域貢献アイデアコンペティション 第1位 「Social meetup」

取り組み内容

私たちのプロジェクト「Social meetup」は、学生、企業、地域社会を結びつける新しいキャリアの対話の場を提供することを目的としています。学生が抱える「就活への不安」や「キャリア選択の迷い」を解消し、企業や地域が持つ「人材不足」や「固定観念からの脱却」といった課題を共有しながら、三者が対話を通じて多様なキャリアの可能性を探る取り組みです。

現在の進捗状況

2025年2月のイベント開催に向けて、企画立案やパートナーシップの形成を進めています。長野県立大学キャンパスを会場とし、基調講演やワークショップ、ネットワーキングなど多彩なプログラムを準備中です。特に学生・企業・地域間の対話を深めるためのコンテンツ設計に注力し、参加者が自己探求と社会接続のヒントを得られるよう工夫を凝らしています。

意気込み

このプロジェクトを通じて、一人ひとりが「自分らしいキャリア」を見つけるきっかけを提供したいと考えています。「働くこと=負担」というネガティブなイメージを払拭し、柔軟で多様なキャリアの可能性を探る場を創り出すことで、学生、企業、地域が共に新しい価値を見いだす循環を生み出したいです。長野県から全国へ、ポジティブな変化を波及させることを目指します。

（グローバルマネジメント学部2年 内田 大晴さん）

支援企業からのコメント

第一生命保険株式会社

長野北営業オフィス長 菊地 陵さん

皆さんのとても熱いSDGs・地域貢献アイデアコンペティションに参加させていただき、とても感動いたしました。長野県の地域貢献そして課題解決等、今しか出来ない一生懸命な活動をこれからも応援しています。そして次回の皆さんのコンペを今から楽しみにしております。

炭平コーポレーション株式会社

管理部 部長 吉越 善広さん

SDGsの掲げる目標及びターゲットに関連付けて、地域・学内の課題解決を目指すという壮大な取り組みを実現しようとしてる県立大学生の皆さんに敬服しております。恐れずに、自信を持って、その大きな志を世の中に送り出してください。これからも私たちはそんな「出る杭」の皆さんを応援し続けます。

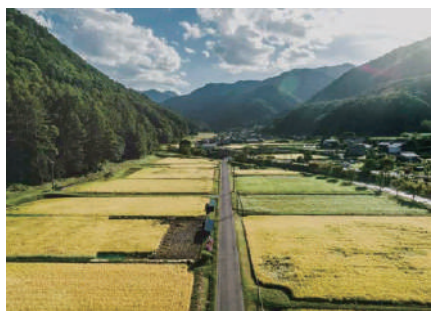
辰野町川島地区農村RMOの取り組み

美しい里山景観と住民主体の地域づくりで、長野県移住モデル地区にも選ばれている辰野町川島地区。一方で、地域の担い手の高齢化や、将来的な里山の荒廃が懸念されています。

そこで、豊かな里山を未来に継いでいくために地域住民が一体となり、農村ビジネスを興しながら、山や田畑の持続可能な保全や生活福祉の拡充にも取り組んでいく、農村経営組織（農村RMO）の立ち上げにCSI地域コーディネーターとして参画・伴走しています。複数回の住民ワークショップを通じて、地域のありたい姿や資源・課題を出し合いながら、事業計画を策定。農水省に採択されれば2025年度より協議会が立ち上がり、3年間の実証事業がスタート予定です。この川島地区から、サステナブルな未来の里山モデルを作っていくことに興味のある方、ぜひご連絡ください！

#サステナブルな農村経営 #オーガニック&ネイチャーポジティブビレッジ
#里山文化の継承

（CSI地域コーディネーター 北埜 航太さん）



持続可能なアクセサリー販売

使わなくなった、または壊れてしまったアクセサリーを回収したものを、パーツとして再利用し、新たなアクセサリーを販売するという活動をこの春から開始しました。今年度は学園祭への出店を行い、アクセサリーの回収を進める回収箱の設置も現在話が進んでいる最中です。

私たちの取り組みはまだ規模も小さく、とても多くの方に認知されている状況ではないですが、活動を知る周囲の反応は良く、これからさらに活動は大きくなると考えています。持続可能な生産と消費のパターンを確保するためのこの取り組みは、私たちのような若者が率先して行うことに意味があると考えます。

#un molde #アクセサリー #SDGs

（un molde）

「今夜、作るSDGs」ワークショップ

昨年度2月、東京下北沢で、CSIや他大学の学生、企業の皆さんのご協力をいただきながら、「今夜、作るSDGs」ワークショップを開催させていただきました。

来場者の皆様に、長野県飯田市で有名な水引のアクセサリーや害獣問題で駆除されてしまった鹿の革を活用したコード留めクリップ、また森林整備の際に伐採されたまま放置されていた木材を活用したスマホスタンドなど環境に配慮したアイテムを獲得できるガチャガチャを回していただいたり、ワークショップ限定のオリジナルアイテムを制作していただき楽しんでいただきました。

#SDGs #ガチャガチャ #ものづくり

（白土 姫歌さん・池田 蒼菜さん・中尾 彩那さん）

おやつ工房PAKKUN

私たちはサークル活動として、食物アレルギー対応食のレシピ開発や親子おやつ教室の開催などを行っています。初のイベント出店では、3大アレルゲンである小麦・乳・卵不使用の米粉ベビーカステラを開発し、販売しました。「美味しかった」と多くの方に言っていただき、喜びとこの活動の意義を強く感じました。

「すべての人に健康と福祉を」という観点から、食物アレルギーのある方にも美味しく安全に食べてもらいたい、食の選択肢を広げたいと思い学生が主体となって活動しています。私たちの活動を通して、より多くの人に食物アレルギーへの関心や理解が深まることを願っています。

#食物アレルギー #食健康学科 #みんなで美味しい

（PAKKUN 下里 明由実さん・佐野 友梨さん）

本学のSDGsに関する主なトピック

本学のSDGsに関する活動について詳しく知りたい方は、大学公式ホームページをご覧ください。右記QRコードからアクセスできます。

電力を全て再生可能エネルギーで調達 国公立大学として初の再エネ100%大学達成（2021）

本学では、使用する電力を長野県の水力発電由来の電力100%で調達しています。この取り組みにより第22回グリーン購入大賞「優秀賞」を受賞しました。

長野県SDGs 推進企業登録制度への登録（2019）

SDGsと組織活動との関連について「気づき」を得て具体的なアクションを進めるため、長野県が全国で初めて制定した制度の第1期登録組織として本学が登録されました。

ペットボトルを使わない ウォーターサーバーの設置（2021）

「プラスチックごみを削減したい」という学生の提案により、理事長裁量経費で学内に給水ボトル不使用のサーバーが設置されました。

人材育成

今年度もさまざまな人材育成を行いました。
多様な人々がつながることで、より多くの発想が生まれ、
可能性が広がっています。

JIBUN発 旅するラボ

主催：長野県教育委員会、KDDI株式会社、長野県立大学、長野県中小企業家同友会　期間：2024年5月から2025年3月まで（全7回）

あなたは、自分が何者であるかを説明できますか？その答えを探すとき、知らず知らずのうちに自分で自分にレッテルを貼っていることに、ふとした瞬間に気づくかもしれません。人は、自分が本当にやりたいことを見つけるのは難しいと感じることがよくあります。乗り越えるべき課題が高いと、直視することが怖くなり、逃げたくなる時もあります。しかし、『JIBUN発旅するラボ』では、対話を通じて自分自身に向き合い、そうした課題に挑戦できる場が広がっています。ここでは、課題や困難に飲み込まれそうになる自分を意識したり、新たな自分の好きな面を発見したりすることで、新たな道を感じることができます。これまで見えなかった自分を理解し、成長するためのサポートも受けられます。長野県立大学、長野県教育委員会、長野県中小企業家同友会、KDDIは、大学生と共に多様な視点から支援し、高校生の成長を心から応援しています。

あなたの旅は、ここから始まります。

（KDDI株式会社 地域共創推進部 横幕 秀明さん）

松川高校と長野県立大学との協働

主催：松川高等学校　期間：2024年5月から2025年2月まで（全14回）

現在、松川高校では、「新たな発想をもち地域社会で活躍する人財の育成」を目標に、「学びの改革」をすすめています。その中心が「総合的な探究の時間」の取り組みです。従来から松川高校では、さまざまなキャリア教育に取り組んでいました。それらの取り組みを、今年度の1年生から学校のグランドデザインと結びつけ、CSI地域コーディネーター新井直彦氏の協力により「MSIS」をはじめました（詳しくは右上のQRコードにて）。

県立大学の学生さんや地域の起業家のみなさんなど、「新たな発想を持つ人と出会い、対話し課題解決する」学びの場は、生徒の視野を広めてくれると期待しています。また、教科活動でも新たな取り組みに挑戦中です。例えば倫理の授業で、「JIBUN発 旅するラボ」のみなさんの協力による授業活動に取り組んでいます。数回の対話を中心とした取り組みではありましたが、この授業を通し生徒たちの話す力、聞く力、書く力が確実に成長したことを実感しています。

（長野県松川高等学校 校長 平林 哲郎さん）

飯山高校・長野県立大学コラボ授業

主催：北信地域振興局企画振興課　期間：2024年9月26日・10月23日（全2回）

長野県飯山高校は、北信地域振興局さん・県立大学CSIさんとの連携プログラムを今年度もお願いしました。本校卒業生を含む県立大学生さん8名に本校へお越しいただき、「はたらくこと・学ぶこと」をテーマにワークショップを開催しました。高校生にとって、自分たちの少し先の人生を歩む大学生の学問観・職業観を聞き、対話する経験となりました。本校の生徒はシャイで自分からグイグイ質問をしたり意見を表明したりするタイプではありません。ですから、このような機会を大切にし、探究プログラムの一環として位置づけていきたいと考えています。

生徒からは以下のような感想が集まり、とても好評でした。「実際に大学生から話を聞いて、自分の進路への考え方を見直すきっかけになったし、歳が近いからこそ、あまり緊張せずに対話することができました。友達の意見を知ることができて自分の意見を深めることができたので良かった。」「私の中で『学ぶ』ということのイメージが変わった。私はまだ進路がはっきりと決まっていないけど自分の『好き』を大事に決めていきたいと思った。」「大学は可能性を広げてくれる場所だと学んで大学への興味が広がったのでよかった。」

（長野県飯山高等学校 SSH委員長 教諭 中川 知津子さん）

東センター長　講演・委員会等活動実績（2024.4~2025.2）

講演会等講師
楽天グループ㈱ Community Empowerment Season ランチタイムセミナー（2024年7月31日）
ながの地域まるごとキャンパス 活動報告・交流会（2024年12月1日）
Dialogue for Change with Rakuten 報告会「Insight 2024」（2025年1月25日）

審議会・委員会等
長野県産業イノベーション推進協議会本部会議（本部員）
長野県伝統的工芸品産業振興審議会（委員）
長野市立長野高等学校・中学校　学校評議員

審査員
SDGs・地域貢献アイデアコンペティション
長野県伝統工芸品展 新作展（2025年1月28日）
メディア出演
『長野市民新聞』NPO新春特集（2025年1月）

公開講座

CSI公開講座は、学生も参加し、
地域の皆さまとともに未来を考える学びの場。
今年度は、地域の方々が気軽に参加できるワークショップ形式や、
「マイプロコミュニティ」が充実。交流を通じて新たな学びを
共有できる場が広がっています。

緑を活かすイノベーション 長野市の山林で描く、アイデアワークショップ

実 施 日▶2024年4月13日(土)
ゲ ス ト▶Team Yamasshoさん

参加者の声

ただのイベントアイデア出しに終わらず、収益を上げる考え方が身に付いたのが良かった。未使用の山が大きなアセットであることを再認識できた。

わくわくつながるご飯会

実 施 日▶2024年5月12日(日)
ゲ ス ト▶折山尚美さん
(合同会社nom 代表社員)

参加者の声

高校生として参加させていただきましたが、先輩方が親身になって、一緒に調理をするところから交流できたので、単純に話すよりも打ち解けやすく、とても嬉しかったです!他の学校の方や一般の方も参加され、色々な価値観や考え方の意見交換が活発に行われていて素敵だな^^と感じました。

Hi! マイプロコミュニティ

実 施 日▶2024年6月8日~
2025年1月8日(毎月8日)

参加者の声

目標をただ考えるだけではなく、前回の目標を共有および改善策を参加者同士で話し合えるところに魅力を感じた。また、悩みや今後の不安についても気軽に話せるのが「Hi!」の素晴らしい点だと実感した。

これからの働き方とキャリアの考え方

実 施 日▶2024年6月10日(月)
ゲ ス ト▶motoさん(起業家・著述家)
萩原早紀子さん(abn長野朝日放送)

参加者の声

自分の信念、価値観、考えを大切にしつつ、社会から求められることを重ね、他人には無い、自分ならではの道筋、勝ち筋を描いていこうと改めて感じられました。大変著名なお二方のお話を、とても近い距離でお聴きできる機会をいただき感謝です。

緑を活かすイノベーション vol.2 長野市の山林で描く、アイデアワークショップ(Yamassho 体験のもり)

実 施 日▶2024年9月28日(土)
ゲ ス ト▶Team Yamasshoさん

参加者の声

共創の体験ができた場面があった。1人のなんとなくのイメージが、議論の中で解像度を上げて一つの企画に落とし込まれていく過程やその感覚がとても楽しかったです。

冒険家と体感する、新しい発見 ~日常を変える感覚のワーク~

実 施 日▶2024年10月15日(火)
ゲ ス ト▶吉田智輝さん
(冒険家/「SEA TO SEVEN SUMMITS」主催)

参加者の声

普段見ることができない世界を感じることができたのが大きい。ゲストのキャリア観について感じられてとても良い時間になった。また今度は信濃町でフィールドワークをしながらお話を聞く機会が欲しい!

「ゼロカーボンな未来のつくりかた」 ~カードゲーム「2050カーボンニュートラル」体験会~

実 施 日▶2024年10月23日(水)
共同主催▶長野県地球温暖化防止活動推進センター

参加者の声

2050年にカーボンニュートラルになればよいのではなく、それまでに温室効果ガスがどんどん蓄積してしまうことが視覚的にわかり、排出量の削減が急務であることがよく理解でき、本質を理解するのにとてもよい講座でした。

地域活動報告会

実 施 日▶2025年1月30日(木)

参加者の声

様々な切り口、様々な場所、多様なメンバー、多くの共創、素晴らしい活動のプレゼンでした。主体的、活動的なメンバーでの取り組みが多かったです。応援していきたい、関わっていきたいと思える活動がありました!

※ゲストの肩書きは開催時点のものです

地域コーディネーター座談会

地域コーディネーターの軌跡と未来

地域を揺さぶり、新たな学びや出会いを生み出す地域コーディネーターたち。学生の成長と地域の変化をどのように引き出しているのか、その想いに迫ります。

北信担当

日髙 健
Hidaka Takeshi

東京都出身。コンサルファームを経て2020年1月に長野県小布施町に移住。地域に根差した事業や暮らしと、異分野のヒト・コトを掛け合わせる活動に取り組む。NTT東日本・東京大学・小布施町の産学官連携プログラム「ミライ構想カレッジ in 小布施」や、地域ぐるみで経営・人事の課題に取り組む「小布施 まちの人事部」等の立ち上げに携わる。

#元豆腐屋を複合施設にリノベ
#対話　#まちの営みを紡ぐ

東信担当

藤岡 聡子
Fujioka Satoko

徳島生まれ三重育ち。「老人ホームに老人しかいない違和感」を元に24歳で有料老人ホーム創業を経て長野県軽井沢町にて「診療所と大きな台所があるところ ほっちのロッヂ」共同代表。共著に『社会的処方』『ケアとまちづくり、ときどきアート』。主な掲載先にAERA「現代の肖像」など。長野県立大学地域CDとして地域や大学生たちが出会う場面を仕掛け続けている。

#人の流れをつくる　#森の中
#動きながら動く

中南信担当

北埜 航太
Kitano Kota

94年、東京生まれ。学習院大学を卒業後、戦略PR会社、HUFFPOSTでの広告制作を経て、19年に辰野町に移住。地域の「間（あわい）」を遊動しながら、共感者や共創者を増やすための広報・コーディネートに取り組む。「伊那谷財団」のリブランディングを通じた共創人口の創出や、持続可能な里山を目指した農村経営体「かわしま里継ぎ協議会」の立ち上げ伴走など。

#取材でつながる、言葉でつなげる
#関係人口から共創人口へ　#点→線→面（コミュニティ）へ

南信担当

新井 直彦
Arai Naohiko

長野県松川町出身・在住。社会教育や学校教育のフィールドで、夢中になるコト、心つき動かされるコトを起点にした若者たちの地域プロジェクトを、立ち上げからアクションまでフル伴走支援する。地域社会やコミュニティをベースにまち全体を学びのキャンパスにする "Community Based Learning"をコンセプトに活動中。

#偶発性・想定外
#マイプロジェクト　#クラフト

CSI菅沼　本日はよろしくお願いいたします。みなさんは現在、長野県立大学の地域コーディネーター（以下、「CD」）として各エリアで活動をされていますが、地域CDの役割をどのようにお考えか、教えていただけますでしょうか？

日髙　地域の課題に地域CDが加わり、普段は交わらないものを掛け算していくことがCDの一つの在り方でもあるのかなと思います。普通にしていたら予定調和で終わっちゃって面白くないから、同じことを考えていそうだけど見ている視点が違う人たちや、見ている方向は全然違うけど面白そうな人たちをあえて掛け合わせて、一緒になってやってみたら何か生まれるのではないかと。今、ある地区で取り組んでいる産官学のプログラムがあるのですが、関係者が多いので、コミュニケーションコストがすごくかかる。ただ、だからこそ普通じゃ生まれない発想が出てくる。お互いの良さとか想いを引き出して、化学反応を起こしつつ、それが爆発しないように調整するのが地域CDの役割なのかなと。

新井　CDはつなぐとか引き出すとかが一般的に言われている役割だけど、色々変化する気がする。時には先生、時にはジェネレーター（自分自身も一緒に考える）、時にはメンターみたいな役割。自分が地域CDとして意識しているテーマは「啐啄同時（そったくどうじ）」。雛が鳴いているのと、親鳥が外からつつくタイミングがぴったりだとうまくいくという意味なんだけど、それを自分はジャストタイミングという意味で捉えていて、今こうやって働きかければ伸びるとか、そういう点を意識しています。もちろん、タイミングは学生ごとに違うんだけど、今しかないみたいなタイミングを見逃さないようにしているかな。

藤岡　うわー面白い！「啐啄同時」の見極めのコツみたいなのってあるのかな？

新井　そうですね…。見極め自体は感性に近いかも。ただ、普段からよく喋ってコミュニケーションを取りながらタイミングを見計らっていくことは意識しています。

藤岡　新井CDは元々教員で、それから地元の役場で勤めて、今はCDをやっている。色々な経験を踏まえて自身の中で変化があったかを聞いてみたいなぁ。

新井　「啐啄同時」は教師の頃も地元の役場に勤めていた頃もテーマとしていたけど、社会との 関わり方というか、自分の開き方がすごく変わった感じはあるかな。CDになる前は、この課題を解決するために誰を割り当てればいいのか、といったような関わり方だったが、今は逆で、その人の内側にあるものから、社会とのつながりを開いていくみたいな。だから、社会課題はどうなんだとかはあんまり考えずに、その人がやりたいことの社会的価値とか、誰とつながるといいんだろうということを常に考えています。

CSI菅沼　学生のやりたい気持ちをしっかりと捉えることが大事なんですね。みなさんは各々のプロジェクトで多くの学生と関わっていらっしゃると思うのですが、長野県立大学生（以下、県立大生）ならではの良さはどんなところにありますか？

新井　良い意味で作為的でない感じかな。どちらかというと好奇心が表にある。面白そう！って感じでプロジェクトに関わってくれる県立大生が多い気がするかな。

日髙　確かに。結果がわからないことを面白がる、どうなるかわからない方がむしろやってみたい、みたいなのは県立大生の特徴としてあるかも。どうなるかわからない、どうやったら面白くなるのかといった余白を残した形のプロジェクトのほうが興味を持ってくれる気がする。だからこそ、レールが敷かれた就活とか、大企業でのキャリアみたいなものに違和感を抱く学生も一定数いるのかなと思っていて。それは良い面、悪い面の双方があると思うんだけど、自分の立場からすると、そういう違和感を面白がる人たちを増やしていく方が、ソーシャルイノベーションが生まれてくるのかなと思っている。

藤岡　それで言うと、私は学生をどれだけ揺らせるかってことを意識しているかな。自分の考えを持つのは大事なんだけど、そうじゃない世界もあるよっていうのを伝えられるか。いかに脳みそを揺らせられるかってことを大事にしている。想像を超えた世界や領域への案内。極端に言うと、地域に一緒に出ることで「エッジに立たせる」みたいな感じかな。不確実性が前提の時代において、端に立ってみるとこっちに島があるのか見えないし、そもそもそうしたところに身を置くっていうのは、やっぱり社会人、オトナは怖くなるじゃない。怖くなるのって、やっぱ年齢に抗えないところがもしかしたらあるかもしれないなと思うと、いかに「学生の時に揺れられる」か。いくら揺れたって、学生で

いられるのだから、どんどん揺れてほしいなと思うね。

日高 エッジに立たせるみたいなところにつながるかなと思ったのが、エッジの曖昧な部分、例えばAとBのエッジでもなくAとBにも分類できないものが、教室にはないけど、地域にはあると思っていて。理論化や体系化された知識を持って世の中に向き合っていくことは大事なんだけど、全然当てはまらない体験を味わうことから得られる学びもあると思うし、その往復がより大事なんだと思う。だからこそ、地域に出ていく意義ってすごくあるんだろうなと。

藤岡 往復大事だよね。確かに理論はあるけど、地域では通用しないこともある。だって地域はナマモノだから。そういうとこで得られる体感は大事。学びではない体感って感じだよね。

北埜 CDにできる役割としてできることとして、「揺らす」という話があったけど、揺さぶりをかけるためにCDっていろんな役割を使い分けている気がします。いま僕が関わっているプロジェクト関連で、漆はすごく面白いなって思っていて。漆には接着剤の役割があるんだけど、水と水を引き離す役割もあって、混ぜ合わせる力もある。3つの矛盾する役割を漆は内包している。CDの役割も、それに近いんなんじゃないかなと思って。学外の誰かと学生をつなげることで、価値観を揺さぶったり、異なる考えを持つ人同士を混ぜ合わせる場をつくることで価値観が変容したり、逆にあえてつなげない選択もする。

日高 若干派生しますが、自分は越境経験を積むことがすごく大事だと思う。越境する中で自分の価値観が揺さぶられると思うんですよね。当たり前だと思っていたものが当たり前じゃない人たちと出会って、その中で自分の持っていた価値観が変わることもあれば、それを再確認するみたいな場合もあると思うんですけど、そういう越境経験を積んだかどうかって、ただ留学するとかそういうことじゃない。自分と違う価値観だったり、考えだったり、バックグラウンドを持っている人と出会って、その価値観の違いを感じる経験を積むと、自ら揺さぶりにいけるし、揺さぶりかけられた時に、立ち止まらずに、そこからそれを活かせるというか。そういう意味でも、学生の時から、同世代の人たちや学校の中とかだけじゃなくて、地域にどんどん出ていって、価値観を揺らしにいくのは大事なんじゃないかなと思う。

CSI菅沼 でも自分の知らない世界へ飛び込むのは勇気のいることだと思います。みなさんはどのように学生を後押ししてあげているのでしょうか?

新井 学生の若いという財産はポテンシャルであり、越境する力だと思っているけど、一方でポテンシャルに気づいてない子も当然いるわけで。なので、僕はプロジェクトに誘うときは、最近では1対1の関係というよりは、コミュニティとして関わるようなアプローチを心掛けている。人から人はもちろんだけど、そこにコミュニティがあるのはすごく大事な気がしていて。

藤岡 1人にさせないっていうのは、私も結構思っているかな。1人と思わせないように、どうやったら背中を押せるのかなっていうのは、すごく考える。なので、(プロジェクトや場などに) 誰か連れておいで一っていう呼びかけはすごく大事な気がする。1人だとあれなんですけど、ちょっと友達連れてきました〜みたいな感じ。1人で全部やらなくていいっていうか、誰かと何かを分け持つみたいな。

北埜 確かに、越境できたら成長できるっていう言い方もあるかもしれないけど、単純に楽しいから、気付かないうちに出ちゃってたことって、結構あるんじゃないかなって思う。実は越境することが怖いっていうのはただの思い込みかもしれない。食べたいお店があったら自然に行っちゃっているのと一緒ではと。越境することは結構勇気がいるってみんなが言うからそう思うだけで、意外と知らないうちに出ちゃってるんじゃないかなと思ったりします。少し話が変わりますけど、CDって学生を後押しするだけじゃなく多様な役割があるわけじゃないですか。むしろ役割が定義されすぎず、それぞれのCDに委ねられている部分が多い。だからこそ、どこまでやるのがいいんだろう、どこまでやればいいんだろうみたいな葛藤がある。地域の全体性のことを考えた時には、いろんなことが目につくじゃないですか。で、これも必要だな、あれも必要だなって気付くと思うし、結局、地域経営のような、人とかお金がどう流れるのかってことも考えていると思うんですよ。でも、自分ができることは絞らないといけないような気もしていて。僕だったら、ライターっていう位置付けは、崩さない方がいいのかなとか思ったり。みなさんは何か意識していますか?

新井 そんなに意識していないかな。こういう状態になったらここまでだな、みたいなものはあんまり考えたことない。どっちかっていうと、今の自分ができる範囲、身のほどでできる範囲をすごく考えるかな。

日高 自分としては、今は定義したくないなと思っていて。定義したい時期としたくない時期の間で揺れる動きはあるんですけどね。今、個人的にもキャリア的にも転換期にあるなと思っていて、自分はこれをやる人ですって定義しちゃうと、ここができればいいやみたいに自分がなっちゃいそうな気がして。どちらかというと、何をやるかではなく、どういう状態を作り出したいかみたいなところを大事にしたいなと。で、その状態を作り出すために、自分がどう関われるのか。自分のキャパは限界があるから、どこまで関わるかとか、何をするかはあるんだけど、やりたいこと、作り出したいものが増えていく中で、どれもやりたいけど、今まで通りの関わり方だとできないから、関わり方を変えるのを今試している。関わり方を変えるから、やっていることは変わっているんだけど、作り出すものは変わっていなくて、膨らんでいるみたいな。具体的に言うと、自分が実務をやって、資料作るのではなくて、それを作れる人を育てたりする方に自分は回ろうとか、事業のスキームを作って、仲間を巻き込んでプロジェクトを形にして、そこに自分も関わりはするけれども、実務を担うわけじゃないみたいな。これまでのプレイヤーという立場から、ディレクターみたいな立場に変えつつ、やりたいことは変わってない。だけどやっていることは変わっているからこそ、やることは定義したくないかな。で、それをCDの役割につなげると、地域CDとしてやれることの限界ってあると思っていて。それをやる人が増えていかないと、インパクトは広がっていかないし、こういう動きって、僕らができるのは手が届く範囲にしか起きていかないから、そういう人を育てたり、育てなくても仲間を増やしていくみたいなのが必要だなと思ってる。その1つのチャレンジとして僕らがやってきたのが学生CDの育成だったのかなと思っていて。彼らとパートナーになって、一緒にプロジェクトを動かしていくことで、僕らが持っている言語化されてないノウハウも彼らに共有したり、彼らから僕らも学びながら、そういう仲間を増やしていっているなと思っています。

CSI菅沼 みなさん、各々想いを持って活動をされているんですね。最後の質問となりますが、地域において学生はどんな存在なのか、地域にどのような変化をもたらしてくれるのか等を教えていただけますでしょうか?

北埜 学生は地域へ自然にすっと入っていく存在なのかなと思います。「地域猫」って言うじゃないですか。集落の中にいて、境界線関係なくうろちょろしている、みんなに可愛がられている猫。学生はそんな存在なのではと思っている。僕が今住んでいる場所は、境界線に関しては寛容なエリアであり、子供たちが勝手に走ってもオッケーな感じがある。大人が自分の世界の中で感じている境界線は実は頭の中にしかないということもあって、子供はそれを持ってないから、うろちょろしていると、大人も「そっか、そういう世界もあるのか」みたいな気付きをもらえたりする。先日、県立大学院生が社会人にインタビューをしてくれたんだけど、学生から真顔で、「なんでこの会社に入ったんですか?」って聞かれると、普段は照れ隠しで話すことも、本音を話してくれたりとかしてくれて。いつもの関係性で問いかける問いと全然違う角度から、新しい関係性で問われた時に、全然違う「分人」※が出てきて。自分が忘れかけていた自分みたいな。意外とそれがいい面だったりもして、そういうフレッシュさを取り戻せるのは、学生だからこそできるし、良い意味で忖度しないっていうのもあるのかなと思う。

藤岡 学生の存在は街の人たちの固定観念みたいなものをものすごい溶かしまくってくれると思う。学生自身も不確実性の中で揺れているんだけど、同時に地域も揺らしていく、概念も溶かしていける稀有な存在。

日高 僕は今、地域の人事部って活動で、地域の経営者同士が対話する場を作っているんだけど、そこに学生も入っているんですよね。学生が入ると、就活の話とか、自分のキャリアどうしようみたいな話になって、結構迷い悩んでいて、それをそのままぶつける。だけど、社会人になると、どうにも答えが見つからない人にそんなに出会わない。そこまで本心を吐露しないので。でも学生が、どうしよう、わけわからないです、とりあえず休学しよ、みたいなことを言ってくれることで、人間はそれもありなんだ、自分も迷っていいんだ、悩んでいいんだ、言ってもいいんだということを大人や経営者に思い出させてくれる存在かなと思う。

CSI菅沼 学生が地域とつながることで生まれる影響は計り知れないですね。我々CSIとしても、より多くの学生が地域とつながれるよう支援をしていきたいと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。

※ 私という一人の統一された自分(=個人)があるのではなく、私の中にいくつもの私がある(=分人)という、内面の多様性を尊重した人間観。

名　　称	公立大学法人 長野県立大学ソーシャル・イノベーション創出センター (Center for Social Innovation Initiatives, CSI)
設　　立	2018 (平成30) 年4月1日
所 在 地	長野県長野市南長野西後町614-4 (長野県立大学後町キャンパス)

2024年度 STAFF

東 俊之　センター長
市川 知明
須藤 展啓
菅沼 隼人
小林 絵美子

https://www.u-nagano.ac.jp/cooperation/csi/
https://www.facebook.com/CSI.nagano/
csi@u-nagano.ac.jp
026-262-1725　026-262-1726

制　作 | カシヨ株式会社
印　刷 | 株式会社 綜合印刷

長野県立大学
THE UNIVERSITY OF NAGANO

長野県立大学は
「長野県SDGs推進企業登録制度」
第1期登録組織です

ミックス
紙 | 責任ある森林管理を支えています
FSC® C006950
VEGETABLE OIL INK
Waterless Printing. Naturally.

発行日 2025年3月17日

※本誌記載内容の無断転載はご遠慮ください